

ドラマ化という手法から見えてくるもの

——自己表現の本質を探る——

太宰久夫*

Development Through Drama

I 自己表現の存在について

人はこの地球環境の中で、自然と共存しながら生きてきた。そして、人が生きるうえにおいて絶対に必要なものが、この地球には天地創造の時よりあった。それは、水と空気である。最近、環境問題についていろいろなところで声高らかに叫ばれるようになり、最も身近にありすぎて、その貴重な存在がともすると忘れられがちだった水や空気について、人々は神経を使うようになった。自然界での人間の生存を左右するものが水と空気であるとするならば、表現について次のようなことがいえはすまいか。人間界（社会・生活・文化）での水と空気が、“自己表現”であると。

現代物質科学の発達・発展には著しいものがあり、それに起因して人の教育についても現代科学文明の推移に立ち遅れることのなきよう、知識・情報習得に重点を置いた教育方法が主流を成してきた。しかし、その主流も今各界で見直され論議が繰り返されている。それは、あたかも環境問題の水や空気の存在と同様に、人間界における心と魂に触れる精神文化の存在のように。精神文化面については、とかくその実態が表に現れにくいものであるがゆえ、特に現行

* 玉川大学助教授

の義務教育のように、児童・生徒の価値・評価を一定の基準をもとにした指数から相対評価する実際の教育現場からは敬遠されているのが現実である。よって、教育の現場では問題視はされつつも、いまだその具体的方法が見出せないまま置き去りにされつつあるのが、“自己表現”に関する分野であるといえよう。

II 自己表現と生活について

現中央児童福祉審議会文化財部会長の岡田陽氏は早くから“ドラマによる表現教育”の重要性を説き、すでに約30年近く前から諸外国（主に英語圏）で盛んに取り組まれていた“ドラマによる表現教育”の理論と実践を取材・研究して日本に紹介し、みずから実践してきた国内では数少ない表現教育の専門家である。彼は長年の教育現場での経験と研究活動から独自の表現教育の哲学と実践を構築し、現在わが国において多方面にその影響を与えている。彼は、表現活動についてその意義を、「人は、言葉や動作などの表現活動によってお互いの心を伝えあう。人は自分の心にうかぶさまざまな思いや考えを、ひとり自分の心にとどめておかないで、何とかそれを他者にも伝え、理解され、心を分かち合いたいと願うものである。人間の社会生活とは、そうした思いを基盤として構築されているといつてよい。人が自己を表現することの喜びを知り、勇気と自信を深める表現力育成のための活動は、心の柔軟な子ども時代にしっかり習性化し、恐れをなくしてしまわないと、成人してからでは難しくなる¹⁾」と力説し、幼少時代からの表現活動の経験を高揚し続けている。

これは、“人間が表現をする”ということは、人間が人間として人間らしく生きていくためには必要不可欠であることをも説いているといえる。人間社会においては、自己の表現が、イコール社会生活におけるコミュニケーションの基盤であることを、表現活動のアプローチからとらえたものとも解釈することができる。これは、単に子供の成長過程において、そのような発想が必要であるから取り組むばかりでなく、将来の望ましい個々の人間像を考えた時、現代以上に複雑で難解な未来国際社会に生きる人間にとって、その人自身の固有の存

在と価値が常に明確に表に現れない限り、真の生き方を見失ってしまうことさえありうるのではないかということも十分に察知できるからである。

III “表現” について

教育界に視点を移してみると、平成2年度より実施されている新幼稚園教育要領では“感性と表現に関する領域”が新たに設定され、現在試行錯誤されながらも各現場において、その実践が展開されている。この領域の最終的な目的とするところは、優れた芸術家や最新のクリエイターを産み出したり、養成するためのものではない。いかに大人（指導者）が、子供たちの豊かな感性を見出し、育み、生かし、引きのばすか……。そして、その結果子供たち自身が常に生き生きとした自己表現のもとで、豊かで柔軟性に富んだ自己表現を行うことができるかを目指したものであると解釈する。この新領域の設定の主旨および目的は、岡田陽が長年叫び続けてきた内容と見事に合致していることはいうまでもない。現代の子供たちを取り巻く環境の中で、とりわけ教育環境の面から考えてみると、実際表現活動のように各自の個性を問われる内容は、義務教育の場ではどう考えても期待できるところが少ないのが現実である。本来、自己表現力の開発についてはその人自身の人格形成に密着していることなので、知識や情報そして技術・方法の習得だけにフォーカスを絞るわけにはいかない。とすると、義務教育にこの問題を押しつけること自体大きな無理があるといえる。表現教育とは、人間の全人格的形成に密着するところが強いため、常に人の生活環境全体の中で総合的・統一的にバランスよく取り行われ構築されなければならない。

IV 自己表現とコミュニケーションについて

表現に関する様々な諸相を、これまでのように芸術的活動の前兆としてとらえるのではなく、人間の日常生活に、またその人の人生に直接的に密接にかか

わる問題として展望した時、自ずとその考え方や見方が拡大される。特に、コミュニケーションという広い見地がそこに出現する。

これまでの私たちの生活文化環境の中では、“以心伝心”“一を聞いて十を知る”等々暗黙のコミュニケーションがあまり大きな摩擦を起こすことなく行われてきたように思える。しかし、その環境も昨今ずいぶんと変貌しかなり西洋的というか、国際的になってきた国内環境である。これまでは、おしとやかに、控え目に、表情を押し隠して、自己を存在させることが“美”とされてきたが、どうやらその美的価値が変わりつつあるようだ。そこで、そういった価値の変遷に伴い、脚光を浴びるのが自己表現に関する能力である。それも、日常生活レベルでの自己表現力から社会生活（仕事面）や専門分野にいたるまで、広くその人の人生に直接的にかかわってくるようになってきている。特に医療シーンにおいては医者と患者とのコミュニケーションは、非常にセンシティブでデリケートであるがゆえに、いかに有効に円滑に行われるべきかが大きく問われる。

1. 個性

多くの人が口を揃えていうことは、「自己表現は苦手です」。これは現代社会に生きる者としては、実生活上で逃れることのできない大問題である。自己表現を行ううえにおいて多くの人が陥る錯覚は、自分をなんとかよく見せようとするために、格好をつけたり、力んだり、はたまた技術・方法にすがりついたりすることである。その結果、自分自身が本来所有している固有の能力、つまり個性を損失してしまい、絵に描いた餅のごとく中身の伴わない外側だけの、真の自己表現というには程遠い表現を行ったり、また自分自身で強い緊張感を生み出し身動きの取れない状態のまま、不本意な自己表現を行ってしまい、ますますコンプレックスを助長させるようなことになるケースが少なくない。この状況は悪循環となって積み重なり、最終的には自分では解決することができない難問となる。

患者の場合の医師とのコミュニケーションにおいてはどうか。当然の

ごとく両者共に豊かなコミュニケーション能力=自己表現力を所有していれば、おそらくさほど大きな問題は起こらないのかもしれない。しかし、そのようなケースは稀であろう。では、医師と患者のそれぞれの自己表現についてどのようにとらえたら、育んだらよいのか、それについては後ほど述べるとして、ごく一般的なコミュニケーションを例に、表現とコミュニケーションの関係について考えてみる。

2. 自己紹介

誰もが一度は経験したことのあるものに、自己紹介というのがある。そのやり方はいろいろとあるが、ごく一般的なタイプの一つ、順番に自己紹介を行うタイプを、その時の内面状態を分析的に再現してみる。まず、自分の順番がくるまでの間「何を言おうか、どのようにまとめようか」等々を必死で考え続ける。だんだん自分の番が近づくにつれ緊張感が高まる。まだ適当な言葉や内容の展開が定まっていない場合、焦り感も募ってくる。そして、自分の番になる。とにかくその場を切り抜ける。その後、終わったという安堵感でしばし放心的になる。気持ちが冷静になるにしたがって、自分の行った内容を回顧し始める。納得できた点については満足し、そうでない点については大きな自己嫌悪感に襲われる。気がつくとき全員の自己紹介が終わっている。このたとえばは若干オーバーではあるが、このような心境を体験している人は少なくない。自己紹介の主旨は、互いが知り合い、わかり合うことにあるのに、コミュニケーションの初期段階であるにもかかわらず、実質このような心境が多くの人たちに作用するため、実際には達成されていない場合が多い。

私自身の経験から、これまで多くの会合で開会に先立ち、まずは自己紹介からと切り出し参加者が喜んだ表情をいまだ見たことがない。しかしながら、十年一日のごとく、このタイプの自己紹介が行われ続けている。自己表現の世界とコミュニケーションの世界からみると、誠にナンセンスである。自己表現の場として、コミュニケーションの場として行われるはずの自己紹介がなんら機能していない。機能していないどころか、参加者にとって苦痛の一時を提供し

ているのが事実である。

なぜそのようなことになってしまうのか。自己表現の本質を真に理解していない現れである。表現とは何かについて、その構造をしっかりと把握したうえで取り組まないかぎり、誠の自己表現の確立と向上はもちろんのこと、コミュニケーション能力の向上は、いつまでたっても停滞してしまうおそれがある。

3. 信頼関係

さてここで、視点を医療保健の現場に移してみよう。医療保健に従事する者を育成する機関は、当然のごとく義務教育の場ではない。それは、高等教育機関において専門的に行われる。ここでは、膨大な知識と技術を基礎から専門そして応用にいたる長いプロセスを踏んで、将来現場で使える人材を育成することに目的があるといえる。当然のごとく、人格完成などといったその人自身に直接的にかかわる問題は、その人自身で取り組むべきことなので、カリキュラムに組み入れられる由もない。にもかかわらず、昨今われわれが取り組んでいる、模擬患者養成に関する実践研究が脚光を浴び、促進されつつある現実は何なのか。II・IIIで表現について、特に子供の健全育成における表現活動の役割について少々触れたが、これは医療保健従事者養成とまったくかけ離れた問題ではなく、逆に非常に密接した要件だからである。

医療従事者が患者とコミュニケーションをもつうえにおいて最重要課題は何かという質問に対して、誰もが躊躇することなく答えることは「信頼関係」である。2.であえて自己紹介というごくありふれたコミュニケーションの一例をあげたのは、この“信頼関係”の基盤についてかかわる部分があるからである。信頼関係とは表側だけで構築されるものではない。その人自身の内面があつてこそ成立することである。あたりまえのことだが、こと“表現”となると意外にそうではないのが現実である。

V 表現のプロセスの一考察

表現とは、読んで字のごとく“オモテニアラウス”ことである。表に現すからには、必ず何らかの根拠があってこそ、その行為が行われる。その根拠とは、その人自身の内にある何か、つまり内面活動といえる。

絵画表現を一つのシミュレーションにかけてみる。

山へハイキングに行った。紅葉の一番美しい時だった。目がくらみそうなほどの色だった。展望台から見た山の景色は最高のものだった。とにかく感動した。この景色を絵にしたいと思った。絵にしたらきっと綺麗で楽しいだろうなと想像した。いろんな色を混ぜて、今ここで目にしている情景を再現することは面白いだろうなあと想像したら、ぞくぞくしてきた。そこで思わずスケッチした。帰宅後、あの黄色と赤に染まった山の景色を思い浮かべながら、スケッチを下に水彩画に表すことにした。色を作っている時とそれを塗っている時がとても楽しかった。そして、一枚の絵画ができた。

これは、表現活動の最もシンプルなプロセスと結果の一例である。ここでの表現方法は水彩画である。絵画表現の結果からみると、表現を行うためには、まず基礎のデッサン力が必要であり、次にスケッチのテクニック。そして、着色のための色配合のノウハウ。最後に筆の使い方。というふうに、多くの技術が必要とされる。これまでの表現教育は、こういった結果からみた方法・技術に対するアプローチに主眼点が置かれていた。したがって、表現活動を行うためにまずこれらの技術の習得から始められた。そして、技術が十分に習得されていない場合は、当然のように評価が低かった。しかし、今重要視されていることはその手前や周囲に存在すべく内面活動についてである。

表現とは、本来「やりたいからやる」ものである。つまり気持ちがあつてこそ成立する構造にある。気持ちが伴わずに行われる表現は前述の自己紹介の例などにみられる、精神衛生上好ましくない状況となり、その人自身にとって決してプラスの作用は働かない。そういった意味からも、表現の基本的構造をき

ちんと押さえないかぎり、いつまでたっても方法・技術面に象徴される外化された部分にばかり気をとられ、その本質に迫ることができない。本質に迫る方法として、ドラマの体験が有効となる。

VI 表現の構造

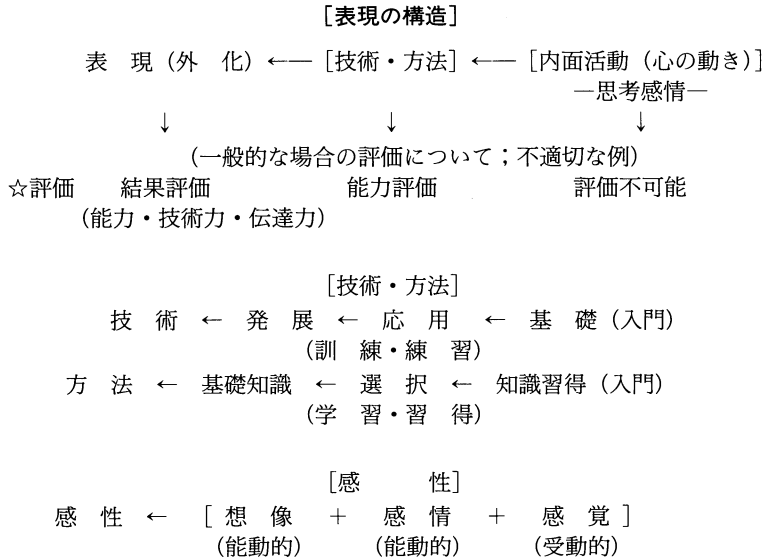
時として表現活動において、想像活動と創造活動を混同して用いられることがある。広辞苑によると、想像とは、「現実の知覚に与えられていない物事の心像（イメージ）を心に浮かべること。過去の経験を再生する場合と、過去の経験を組み合わせて新しい心像をつくる場合とがある。想定すること。」とある。表現の世界からフォーカスを絞ると、つまり想像とは「思いやる気持ち」のことである。この想像に対して、創造とは、広辞苑によると、「新たに造ること。新しいものを造りはじめること。」とある。

この2つの言葉を、表現のアプローチに乗せると次のように考えられる。豊富な想像活動を体験することによって、豊かな想像力が育つ。そして、体得した想像力を駆使して創造活動が行われる。

感性とは、理性に対していう用語である。理性とは論理的に物事を考え、判断し、行動する能力をいう。対して、感性とは感じる能力といえる。

感じる力は、2つの構造をもつ。1つは、感覚・感受性である。これは、外からの刺激を内に入れることである。感性の受動的部分といえる。もう1つは、感情である。外からの刺激を受け入れ、それに対して反応するものである。これは、感性の能動的部分といえる。感性の構造は、感覚・感受性にみられる受動的なもの、感情にみられる能動的なものが相互に働き、人間の内面に様々な作用を及ぼす働きから成り立っているといえる。感性と表現とよくいわれる。なぜ、“感性と表現”というふうな2つの言葉がつながっているかということ、上記に述べた感性の構造から考えると、人間は外からの刺激を感じとる。そしてその刺激の反応として快、不快、喜び、悲しみ、怒りなどという感情が起り、それが原動力となって行為・行動に発展する。具体的に書く、描く、奏でる、

踊る,そして話すなどの方法・技術を用いて外化作用が起こる。この時点で,その人の内面活動が表に現れてくる。つまり表現である。表現の構造について下記に示した。



図式 [表現の構造] は、表現の成立について図式化したものである。この構造についてはこれまで多角的に述べてきたので省くとし、この図式にあえて付け加えてみた評価について説明する。評価と一口に言ってもそこには様々な理論と解釈がある。ここでは、現行一般的に用いられている客観評価の側面から考えてみた。端的にいうと、良いか悪いか、上手か下手か、よくできたか、できなかったか、間違わずにできたか、間違えたかなどにみられる正解・不正解に近いものである。表現とは、自己本来のものであるので、果たして前述したようなタイプの評価ができるものであろうか。英国の表現教育家であるブライアン・ウエイは、そもそも自己表現に対して評価を下すという発想そのものが表現を真に理解していない証拠であると、私に語ったことがある。そして、評価をするかわりに、サジェスチョンをすることであると力説した。

何故、この図式に表現教育の世界ではやってはならないとされている、評価

を記入したかという点、わが国の表現に対する理解がこの評価に象徴される世界にあることへの一つの批判的精神からである。内面活動の評価不可能＝教育現場では取り組めないということを改めて明示してみた。

次の技術・方法の図式について。この図式で見落としとしてはならない点は、技術・方法を習得するにあたっては、必ずその発達段階を的確に押さえながら進めないと、表現を行うための適切な経験の蓄積にならないということである。時として基礎からの進展を無視して活動に取り組んでいるケースをみかけるが、この場合継続的發展を遂げた例をあまり聞かない。方法についてのみ抽出してみても、知識習得を飛び越えると選択の余地がなくなる。すると体験者にとっては、偏った方向で表現が認知されたまま成長する。その結果、行き詰まった時の逃げ場所がなくなってしまい、自己表現の自己放棄へとつながる危険性が起こる。

さて最後に感性の構造について。この構造に含まれる内容をダイレクトに育成する方法はまだまだ厳然としたものが少ない。たとえば、様々な表現のための技術面に関してはハイテクノロジーによって、多くの効果的で有効な方法が開発されてきた。しかし、内面活動＝“感性”に関してはその実態を目や耳で直接確認することが困難なため、いまだ未知数の多いものである。そこで、感性の構造を把握することによって、その開発・向上のための糸口を探り出すことが賢明と思う。

まず、感性とはその人自身の固有のものである。ということは、表現の元となる感性を磨くためには、自分自身をよく知っていなければならないということではないだろうか。自分とは何か、アイデンティティの構築は自己表現への道しるべである。ドラマ（クリエイティブ・ドラマ）の活動は自分さがしの旅というふうにも私は解釈している。ブライアン・ウエイはそのものずばり「生きる練習」と明言しているが、その練習課題としていろいろなタイプの練習課題（エクササイズ）を提供されている。その中に、集中・感覚・想像それぞれの練習課題が具体的に提示されている。自分がどのような能力をもっているのか、それもここでいう能力とは、技術力や知覚力ではなく主に感じる力につい

ドラマ化という手法から見えてくるもので、本当の自己表現のために自分さがしの旅へ出発するための、自己発見に関するプログラム事例を私の研究室では盛んに開発している。感性を磨き総合的表現へと発展させ、すべての者が豊かなコミュニケーション能力を獲得することを願ってやまない。

参考・引用文献

- 1) 岡田 陽：I 表現活動を考える—表現活動の意義—，子どもの表現活動，玉川大学出版部，1994.
 - 2) 太宰久夫他：表現，玉川大学通信教育部，1991.
 - 3) ブライアン・ウェイ，岡田 陽他訳：ドラマによる表現教育，第6版，玉川大学出版部，1985.
 - 4) 岡田 陽：ドラマと全人教育，玉川大学出版部，1985.
 - 5) Helene S. Rosenberg：“Creative Drama and Imagination”—— Transforming Ideas into Action ——，CBS College Pub，1987.
 - 6) Nellie McCaslin：“CREATIVE DRAMA”，Longman，1987.
-